
You are my Alice.

葉月 恵里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

You are my Alice .

【Nコード】

N8485W

【作者名】

葉月 恵里

【あらすじ】

黄金の髪に澄み渡った青空を思わせるような瞳。

そんな姉をコンプレックスに感じる、アリス・キヤメロンはひよんなことから絵本「不思議の国のアリス」の世界へ来てしまう。

冷静沈着で現実主義の主人公、関西弁の女王、耳が取り外し可能の白ウサギ・・・
愉快な仲間達と過ごしていく中で複雑な”事情”に巻き込まれるアリス。

彼女は、無事に元の世界に戻ることができるのか!?

「全ては、君が決めることなんだよ。アリス」
「ようこそ、愉快な国へ」
「フンダーランド」
「...」

11/24 大幅に変更しました。

おとぎの世界 1

ふと目が覚めた。

ここは、どこ……？

私のつま先の幅より小さい、赤いドア。

そのドアノブには小さくハートの紋章が描かれてあった。

(こねって、まさか……。)

どうやらその空間では私は大きすぎる様で。

傍に置いてある三本脚のガラスのテーブルは、私にはちょっと小さすぎて(膝の高さ)、その上には何やら紙と何かの塊があった。

いつか見た、おとぎ話の様な光景。

先程の出来事を思い出し、ふと視線を上に向ける。

トンネルを縦にしたような、その一番奥に水色と白色を確認した。空だ。

(私、あそこから落ちて……。)

これではまるで「不思議の国のアリス」ではないか。

否、問題はそこではなかった。

「ああっ！」

大切なものを、白いウサギに取られてしまったのだ。

* * * * *

「アリスー？どこにいるのー？」

薔薇の咲き誇る庭園で一人、紅茶を飲んでいたアリス・キヤメロンは遠くから彼女を探す声にほっと溜め息をついた。

(姉さんだ。)

たつたつた……という軽い足音が近くなり、カップを持ったまま見上げると、そこには先程の声の主、クリステイーナ・キヤメロンがいた。

「どうしたの？姉さん」

「アリス、今日は舞踏会なのよね！」

クリスティーナはいつも以上に声を上げる。

まあ、無理もない。

今日は、オースティン侯爵主催の舞踏会があるのだ。

正直、アリスはそんなものに興味はなかった。

「アリス……どうしたあなたはいつも、そんなに寂しそうにしているの？」

私が……？

全くそんなつもりはなかったのだが。

「何でもないわ。私は大丈夫よ」

そう微笑めば、クリスティーナは安心したように碧い瞳をより一層輝かせた。

「私たちも、そろそろ”そういう年頃”よねえ」

私は来月で16、クリスティーナは先週19になったばかりだ。

「ねえ、アリスには……好きな人とか、いるの？」

好きな人……。

そう問われて、アリスは少し考えた。

今まで一度も考えたことなどなかったのだ。

趣味は読書にバイオリン。

趣味以外に私の興味を引くものなど、あるのだろうか。

「いないわ。姉さんにはいるの?」

逆にそう尋ねられたクリスティーナは少し頬を赤らめた。

(そうよね、皆いるのね)

「……一緒に踊ろうって、今日……。」

そう小さく呟くと手で顔を覆ってしまった。

姉のクリスティーナは美人だ。

きっと、今日の舞踏会でも注目的になるだろう。

黄金色の髪に遠くまで澄んだ空を思わせるような碧い瞳。

それに対し、茶色の髪に翠の瞳をしたアリスにとってクリスティーナはコンプレックスでもあった。

どうして姉妹なのに似ていないのだろうか。

性格も正反対だった。

天真爛漫な姉と理屈っぽい妹。

当然、可愛がられるのは姉の方だとアリスは十分に理解していた。

幼少期に病気を患っていた姉は大事に大事に育てられた。

妹のアリスでさえ、姉の部屋に入れてもらえなかったので、幼い頃はほとんど姉の姿を見たことが無かったのだ。

今では無事に病気は治ったが、まだ姉を”特別視”しているように思えた。

父親も母親も、分け隔てなく愛してくれている
そう信じ
ていたかった。

これは、単なる嫉妬だろうか？

……ならば、姉に嫉妬している私なんて最低だ。

姉はいつでも私を気に掛け、優しく微笑んでくれる。

そんな姉に少しでも悪意を抱く自分なんて、大嫌いだ。

「アリス、どうしたの？」

「ああ……ちょっと考え事。それにしてもその相手って……ウィリアム？」

ウィリアムというのは、私たちの幼なじみであり、ブラウン家の三男。

昔、クリステイーナが病気を患うもつと昔、

私たち三人はよく遊んだ。

薔薇園を駆け廻ったり、執事のアランに悪戯したり。

確か、あの頃から二人は両想いだったような気がする。

「え！？な、何でわかったのよ！」

「ずっと昔から好きだったのでしょうか？姉さんのことなら何でも分かるわ」

そう、私たちは姉妹だ。

誰が、何と言おうと。

久しぶりにこんなに姉と話した。
他愛も無い、くだらない話。

どこからか物音が聞こえたかと思えば、アランが現れ、薔薇園で紅茶を飲む私たちに呆れながら微笑んだ。

「クリスティーナ様、ウィリアム・ブラウン様がお見えです」
「ウィル！？ごめん、アリス。また後でね」

軽く芝生の地面を蹴り、嬉しそうに駆けだしていった。

* * * * *

一人薔薇園に取り残されてしまった。

見上げれば、青く青く、姉の瞳の様に澄んだ空が広がっていた。

そろそろ帰って舞踏会の支度をしようとした時、

ガサッ

「！」

振り向いた瞬間、影が木々の中に隠れた。

（今のは、何……？）

そっと木々の間を覗くと、白いふわふわしたものが視界に映った。

これは何だろうと思った刹那には、アリスは尻もちをつき、手で身体を支えている状態だった。

お尻に痛みが走る。

どうやら、あの白いものに突き飛ばされたらしい。それにしても凄く強い力だった。

その白い物体は遠くの森の方へと走って行ったが、アリスは自分の胸につけていた筈のペンダントが無くなっているのに気付いた。

それは、アリスがいつも大切に持っていた、母からの贈り物だった。

（さっきの……）

アリスは息を整え、どんどん小さくなってゆく白い物体を追いかけることにした。

おとぎの国の世界 1 (後書き)

11/19 修正しました。

おとぎの国の世界 2

「どうしてなのよ、もう！」

白い物体を追いかけながらアリスは小さく悪態をついた。

大切なペンダントを奪われてしまった。

お母様に貰った、自分の瞳と同じ色をした宝石が埋め込まれた、ペンダントを。

嗚呼、どうしてもっと注意深くしておかなかったのだろうか。
ドレスの裾を指で摘まみつつ、少女は後悔していた。

”それ”は地面を蹴り、アリスから逃げている。

もう辺りは薄暗く、緑、緑、緑……と緑色の世界が広がっていた。
静謐な自然の鼓動。

これを何と叫びたのだろうか。
アリスは最近読み始めたばかりの本の一部分を思いだそうと記憶を手繰り寄せていた。

ぬばたまの、

ぬばたまの森

…。

(そうよ、この言葉が一番合っているわ)

しかし、そんなことを考えている間にも白いそれは小さくなっていくばかり。

既に、アリスは目の前を走っている物体が白ウサギだと知っていた。

地面を跳ね、四本足で必死に走る姿。
アリスは視力に自信を持っていた。

走るウサギとそれを追う少女。

森の木々は悠然とそれを見下ろしていた。

大変だと同情してくれているのか、

滑稽だと嘲笑^{わら}っているのか。

少女には分からない。

「っ……っ」

荒い息を呑みこむ。

流石にもうそろそろバテてしまいそうだ。
膝が痛い。胸が苦しい。

その時、

アリスから逃げていたウサギが右側に”ずれた”。

彼女の視界から消えたのだ。

アリスは一瞬焦ったが、足を止め、右の方向へ目を凝らした。

ウサギが大きな大きな、木の根に居る。

じっと、こちらを見ていた。

まるで、「早く来い」とでも言うように。

アリスは息を殺しながら、ゆっくりとその木の根に近づいた。

「えっ」

魔法のような光景にアリスは目を疑った。

目が合った瞬間、ウサギは消えたのだ。

単なる見間違えなのだと思いを落ち着かせ、その根に接近する。

ジャリ……という土を踏む音。

緑の影がアリスを映し出す。

「これ、は……っ！」

”穴だ”と言う前に少女の体は何かを押され、その中に引き込まれてしまった。

ぬばたまの森、

誰も知らない、知るはずもない、

ただ在るだけのその空間。

世界と世界をつなぐ、時空間のズレ。

「手荒な真似はしたくなかったのですが、ね」

さも愉快そうに白いウサギは”穴”を覗いていた。

* * * * *

宙に浮いているような感覚。

さっきまで地に着いていた足は浮いていて。

けれどもどこか浮いていないようで。

アリスはゆっくりと瞼を開いた。

「え………?」

自分の身体がくるくると回っている。

まるで、雲の上から落とされたようだ。

落と”された”?

(私は、あの時………)

ウサギを捕まえようとして、

ウサギのいた根に穴があって……。

”落ちた”んだ。

重力というのは、こんなに力が強いものなのか。

もしも、重力が無かったら、私の身体は宇宙に放り出されるらしい。

家庭教師の教授から重力のことは教えてもらっていたが、よく分からなかったのだ。

否、本に書いてあることの原理は理解できる。

けれども実際、本と同じなのかなんて分からない。

ぼんやりとする思考の中で、アリスは不安を覚えた。この穴の奥には、何があるのだろうか。

私は今、どこへ向かっているのだろうか。

もう二度と、クリステイーナに会えないのだろうか。

(怖い……)

ぎゅっと目を閉じた。

「いつ……」

衝撃を背中に感じ、アリスの体は何かの反動で跳ねた。

2、3回跳ねた後、衝撃は何かに吸収された。

アリスはゆっくりと起き上がると、その何かが何なのか確認した。

どうやら穴の奥にクッションがあり、アリスはその上に落ちたらしい。

アリスは啞然とその場に立ちつくした。

「ここって……」

(どこかで見たことあるような

)

周りを見渡し、今自分が置かれている現状を理解しようと考えを巡らせる。

いつか見た、あの絵本のような光景。

内心動揺していたアリスだが、足元にある小さなドアとガラステーブルを交互に見て鼻で笑った。

「……今日は変な夢ね」

「夢じゃありませんよ」

どこからか声が出て、アリスは小さく肩を震わせた。

「だ、誰………？」

ひょこひょここと目の前に現れたのは、

「先程は申し訳ありませんでした」

見覚えのある真っ白な毛並みの

「あっ………！」

先程までアリスが追いかけていた白いウサギだった。

おとぎの国の世界 2 (後書き)

11/19 大幅に変更しました。

おとぎの国の世界 3

宙に浮いているような感覚。

さっきまで地に着いていた足は浮いていて。

けれどもどこか浮いていないようで。

アリスはゆっくりと瞼を開いた。

「え………?」

自分の身体がぐるぐると回っている。

まるで、雲の上から落とされたようだ。

落と”された”?

(私は、あの時………)

ウサギを捕まえようとして、

ウサギのいた根に穴があって……。

”落ちた”んだ。

重力というのは、こんなに力が強いものなのか。

もしも、重力が無かったら、私の身体は宇宙にほ放り出されるらしい。

教授から重力のことは教えてもらっていたが、よく分からなかったのだ。

否、本に書いてあることの原理は理解できる。

けれども実際、本と同じなのかなんて分からない。

ぼんやりとする思考の中で、アリスは不安を覚えた。

この穴の奥には、何があるのだろうか。

私は今、どこへ向かっているのだろうか。

もう二度と、クリスティーナに会えないのだろうか。

(怖い……)

ぎゅっと目を閉じた。

「いっ……」

衝撃を背中に感じ、少女は何かの反動で跳ねた。

2、3回跳ねた後、衝撃は何かに吸収された。

アリスはゆっくりと起き上がると、その何かが何なのか確認した。

どうやら穴の奥にクッションがあり、アリスはその上に落ちたらしい。

アリスは唾然とその場に立ちつくした。

「ここって……」

(どこかで見たことあるような

)

周りを見渡し、今自分が置かれている現状を理解しようと考えを巡らせる。

いつか見た、絵本の絵のような光景。

内心動揺していたアリスだが、足元にある小さなドアとガラステーブルを交互に見て鼻で笑った。

「嗚呼、今日は変な夢ね」

「夢じゃありませんよ」

どこからか声がして、アリスは小さく肩を震わせた。

「だ、誰……？」

ひよこひよここと目の前に現れたのは、

「先程は申し訳ありませんでした」

見覚えのある真っ白な毛並みの

「あっ……！！」

先程までアリスが追いかけていた白いウサギだった。

おとぎの国の世界 3 (後書き)

11/11 白うさちゃんの口コミを変更しました。

おとぎの国の世界 4

訳が分からず、目の前のウサギを見つめる。

(まさか、ウサギがしゃべるなんて……。)

「えーと？」

白いもふもふは首を傾げ、鼻先をひくひくと動かす。

「初めまして、アリス。私はダニエルです」

アリスは硬直した。

ウサギが、動物が、もふもふが、

人の言葉をしゃべったのだ！

そんな訳ある筈ないでしょう。

アリスは冷静に自分の持論を並べる。

どう考えてもウサギが高度な知能を持っているとは思えない。

確かに、姉さんの飼っている小鳥は言葉を発する。

しかし、その言葉の意味を理解し、話しているのではない。

いつも冷静沈着な彼女は、動揺していた。

そんなアリスを尻目に、尻目に白いもふもふはどこからか小さな瓶を取り出した。

「今からアリス、あなたにはこの薬を飲んで頂きます」

渡された瓶を怪訝な目で見る。

透明の小瓶に入れられているそれは、眼がチカチカしそうなビビッとピンクの液体。

怪しいとしか言いようがない。

「それって……」

「ああ、大丈夫ですよ。人体に影響はありません」

飲む気はしなかった。

早く帰ろう、そう思った。

後ずさったアリスにもふもふはアリスがここに、この森に来てしまうこととなった元凶の翠のペンダントを見せつけた。

「返してっ!」

手を伸ばしたが、ウサギによってそれを阻止される。

「飲んでください」

躊躇していたアリスだが、ペンダントをちらつかされた為、何も言えなくなってしまった。

ゆっくりと栓のコルクを抜き、瓶に口を付けた。

表情はないものの、アリスにはその白ウサギが笑っているようにも思えた。

* * * * *

女は玉座にもたれかかり、小さく溜め息をついた。

傍で控えている二人の侍女の内の一　　最近入って来たばかりの遠い大陸出身の新人　　が肩を震わせて怯えているからだ。

女は眉を寄せると、それを見た侍女はごくりと唾を飲み込んだ。

その侍女の隣にいた古株の侍女が新人を睨みつけ、新人は身を竦める。

きつと祖国で女について色々吹き込まれたのだろう。

（誰だ、人の在りもしない噂をしている奴は）

女は国を治めている。

人々は女を女王、と呼ぶ。

だからと言って女は見栄を張ったり、身勝手をするような人間ではなかった。

女は自分の地位や名誉、美貌を鼻にかける人間は嫌いだった。

そんな女の性格は、城の内装が示している。

前代の王が飾り立てた家具や装飾品は全て売り払った。

今まで赤字ばかりだった国は建国以来初めて、黒字になったのだ。

それでも女は不満足であった。

時間に遅れても悪びれた様子は一切見せないウサギも（現にここへ来るように命じているのに来ていない）、悪逆非道だの卑劣だの騒

ぐ遠い大陸の国々も（何度説得しても怯えるだけで効果はなかった）
庭師の造る薔薇の庭園も（グロテスクということばがよく似合う
程）。

「それにしてもあのパシリは一体何をしているんやろうか」

どこか変わったイントネーションの音が小さく響いた。

おとぎの国の世界 4 (後書き)

12/24 若干訂正。

おとぎの国の世界 5 (前書き)

1 / 1 1 文末書き加えました。

おとぎの国の世界 5

「で、私に何の用ですか」

アリスは目の前のウサギ

いや、元はウサギだった男

を

恨めしそうに睨みつけた。

どう考えても彼らの身長差はおかしいものであった。

さっきまでウサギがアリスを見上げる形だったが、今は正反対だ。

変化が起こったのは数分前のこと。

あの怪しい薬を飲んだ瞬間、アリスは布の山に埋もれた。

真っ暗になった視界の中に小さな光が差していた。

紛れもなく、あの光の入ってくる穴は襟の部分なのだが。

そこから小さな布が落とされ、それが服だと気付いたアリスは素早く着替えた。

また視界が白く染まり、今度は巨大な白い物体が視界いっぱいに広がった。

嫌な予感を感じながらも、ほぼ真上を見るようにすると、可愛かった筈のウサギが少々不気味に見える。

そのウサギは又もやどこからか液体の入った小瓶

さっき飲ま

された液体の緑版

を飲み干した。

瞬く間に巨大なそれは自分と同じぐらいの大きさになり、身体全体を覆っていた白い毛が消え、白いジャケット姿の男が現れた、というわけだ。

これはおとぎ話の「不思議の国のアリス」によく似た光景だが、少なくともウサギは人に変わらなかったはずだ。

強烈な“違和感”を感じながらも、アリスはあくまでも冷静に疑問を口にした。

私に何の用だ、と。

これは何の真似ごとなのだ、と。

「アリス、まずはあなたがこのドアの向こうの門を潜らなければならぬのです」

男が指差したドア　　さっきはアリスのつま先が入るかどうか程の大きさだった　　は丁度いい大きさに見える。

「あなた誰？人攫い？もしかして人身売買なんてこと　　」

「まさか。私はダニエルです。それ以外の何者でもありません」

ますます疑わしい。

大体、名前を知っているっていうこと自体がおかしいのだ。

（仕方ないわね。逆らったってここがどこかさえ分からないのだし

……。人身売買なら、お頭に会って何とか話をつけるわ。

こういう犯罪心理学ってというのは……）

違う世界へ旅立ったアリスをダニエルは苦笑いを漏らしながら止める。

「心配しないでください。あなたは私の主にちゃんとお話ができません。ですから、このドアの向こうへ行きましょう」

（よくそんなこと言えるわね。隙について逃げるしかないのかしら……）

アリスは渋々頷き、脱出方法を考えるのであった。

* * * * *

「こちらへどうぞ、アリス」

胡散臭い微笑みを浮かべながらダニエルは毒々しい色
赤と緑
の混じった異国風の ドアを開いた。

馬鹿な。

アリスは目を見張った。

今いる場所とドアの向こう側の世界が違いすぎる。
その光景はまさに不思議の国ワンダーランドという名に相応しい。
いや、それ以外の名が浮かばない。

アリスは頭を抱えた。

ああ、本当に何ということだろう。

そこには、いつか読んだおとぎの世界があった。

どう考えてもおかしい。

ウサギを追いかけて、穴に落ちるところ。

落ちた先にあった小さなドア。

飲むと身体が小さくなる薬。

(もしかしたら、面倒なことに巻き込まれるんじゃないかしら……)

即座に回れ右をしたアリスをダニエルが呼びとめた。

「あなたに逃げる場所はないのですよ」

「……どういふこと」

微笑みを崩さないダニエルをアリスは見上げる。

思考の海に浸っていたため気付かなかったが、ダニエルの瞳は赤だ。綺麗な真紅に染まる瞳も、今は非常に憎らしい。

一体私に何をさせようと言うのか。

そんな疑問に答えるように、ダニエルは答えた。

「あなたにしかできないことがあります。それはこの先の世界のこと。国はあなたに助けてもらいたいと思っていますのです」

私にしか出来ないこと？

そんなもの、存在するのだろうか。

だいたい、自分出来ることがわからない。

それも、国が自分に助けを求めているなんて。

一体何の騒ぎなのだろうか。

「ぜひ来て頂きたいのです。アリス・キャメロン様」

ふと見上げた顔に、先程まであった微笑はなかった。

まっすぐにこちらを見つめる瞳。

嘘じゃないと、確信した。

「……わかったわ。ダニエル、連れて行って」

一瞬驚いたような表情をしたダニエルは元の微笑を浮かべる。

「畏まりました」

ようこそ、愉快な国へ 1

なぜ、このドアの向こう側へ行こうと決意したのか。
そう問われて、私は何と答えるだろう。

自分が必要とされていると。
そう、言われたのは初めてだったから？
わからない。

私は、優しい人間でもないし、お人よしでもない。
けれど、もし、自分を必要としている人が困っているのだとしたら。
自分に出来るかどうかなんてさっぱり分からないけれど。
助けたい、そう思った。

「ようこそ、ワンダーランド 愉快な国へ」

一步、踏み出す。

足元には、緑の草花。

綺麗で美しいものもあるが、口のようなものがついている。

(食虫植物……？)

遠くの方に見える、ラフレシアのような花々。

空には、橙色の鳥のようなものが飛んでいる。

「……本当に、容赦ないのね」

「ここは不思議ワンダーランドの国ですから。あなたの居た世界とはまた異なっているのですよね？」

「ええ……。こんなに鮮やかではなかったわ」

相続争いがあつて。

貴族の令嬢は社交界があつて。

顔が良ければ良いほど良い縁談に恵まれて。

自分より位の高い者に頭を下げて。

生まれながらにして裕福な者も居れば、貧しい者もいて。

名誉や金ばかり縛られて、動けなくなってしまう。

「……もっと、狭い世界だった」

「狭い世界？」

「ここがどうだかは知らないけれど……。きっと、ここよりもつまらないわ」

ああ、確か今日は舞踏会があつたはず。

この際、どうでもいいわ。

姉さんやお父様には迷惑をかけてしまふかもしれないけれど……。

「行きましよう。改めて私わたし、ダニエルがご案内させて頂きます」

アリスは微笑み、差し出されたその手をとった。

* * * * *

「アリスー！アリスー！……あれ？どこへ行ったのかしら……」

ふと、アリスが紅茶を飲んでいたテーブルを見やる。

まだ少しだけぬくもりの残っているカップと分厚い小説だけがそこに残されてあった。

「おかしいわね……」

庭園の薔薇を見渡す。

しかし、そこにアリスの姿はなく、クリスティーナは溜め息を漏らす。

(そういえばここ、アリスの好きな場所よね……)

アリスはこの庭園の薔薇はあまり好きでないようだった。

その薔薇の端に咲く、小さな白い花をつける野草が好きと言っていた。

華やかなものが好きなクリスティーナには理解できなかった。

妹は　アリスは、いつも完璧な人だったように思う。

感情の起伏がほとんどなく、学力もクリスティーナよりずっと上だった。

時折、アリスが分からなくなる。

何を考えているのか分からない。それにいつも遠くを見ているようだ。

笑うことも少なかった。

小さい頃もそうだった。

父も母もクリスティーナをとても大事にしていた。

そんな両親に媚びることもなく、妹は無表情でひたすら勉強に打ち込んでいた。

切れ長の涼しげな瞳はクリスティーナのくりつと丸いそれとは反対で。

顔立ちも性格も、アリスの方が大人びていて。

アリスはいつも誰も踏み込んではいけないような雰囲気醸し出している。

クリスティーナはアリスが嫌いではなかったが、少し苦手だった。

それは、自分と違い過ぎてなんとなく近づきずらかったからだ。

アリスと同じく、クリスティーナもまた、そんな妹をアリスコンプレックスに思っていた。

そこまで考えて、クリスティーナはアリスを探すのをやめた。

アリス自身、自分と同じようなことを考えているのかもしれないと、姉としての勘がそう伝えてきたからだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8485w/>

You are my Alice.

2012年1月12日01時03分発行